

「窓から逃げようとしたんだって？」

報告を受けて、仕事を切り上げて商館に戻ったハーランは、ベッドでふてくされたように座っているオーリを見て、ふしぎとワガママな妹を見るような気持ちになった。

ハーランは、ふいと顔をそむけたままこちらを見ようともしないオーリのそばにひざまづき、そつとその手を握る。

「知ってたかなあ？ 三階から落ちると、人は死ぬって」

「じゃあハーランは、人は閉じ込められると逃げようとするって、知らなかった？」挑むような口調に、ぞくりとする。

振り払わない手が嬉しくて、ハーランはオーリの指の間に自分の指を絡めた。

あれだけのことをされたのに、最後の一线で拒絶しきれない、そういう愚かさを愛しいと思う。

この愚かさが自分以外にも向けられるのだと思うと、ひどくおぞましく感じる。

「知ってるよ。子供のころ、イタズラの罰で部屋に閉じ込められても、俺はいつも抜け出そうとしてた。——なあ、覚えてるか？」

「何を？」

「俺が二階の窓から抜け出そうとして、窓枠にぶら下がってさ。でも急に怖くなって、降りることも登ることもできなくなって、声も出せずに泣いてたら、オーリが気づいてひっぱりあげてくれたこと」

ふと、こわばっていたオーリの表情が和らいだ。

くすりと笑ってハーランを見る目は、昔のように穏やかだ。

「覚えてるよ。その事件のせいで、子供を罰で閉じ込める場所が、一階の院長室の倉庫になったことも」

「あれは叱られたよなあ。特にヴィスクにめちやくちやにさ」

「半分泣いてたもんね、ヴィスクの方が」

くすくすと、昔を懐かしんで笑い合う。

だが穏やかな空気は、すぐにどこかに溶け去って行ってしまった。

気まずい沈黙が流れて、ハーランは立ち上がる。

オーリの隣に腰を下ろすと、オーリはちらと、困ったようにハーランを見た。

「ねえ……どうして私を閉じ込めるの？」

「どこにも行つてほしくないから」

「じゃあ私、一生この部屋から出られないの？」

「ずっと俺と手をつないでくれるなら、出かけてもいい。オーリはどこ行きたい？どこにでも連れてくから」

「ハーランの監視付きで？」

「だってしょうがないだろ？ 馬車から飛び降りようしたり、窓から抜け出そうしたり、オーリはいたずらっ子だから」

「だってそうでもしないと、逃げられないもの」

「そう。逃げられないんだよ、オーリは。もう、俺のそばにいるしかないんだ」

「そんなの変だよ、ハーラン」

「わかってるよ、変だって。でも、どうにもできないんだ。何でも用意するよ。オーリが欲しい物、なんでも。話し相手が欲しいなら、女中を雇うから」

「自由が欲しいって言ったら？」

「教えただろ？ 腰のナイフ」

オーリはハーランの手を振り払って立ち上がる。

訳もなく本棚に向かったオーリを追って、ハーランはその背後に立った。

「なあ、怒った？ 怒ってる？」

「怒ってるというか……」

オーリは顔を顰めて、なんとなく本の背表紙を撫でた。

「悲しい……かな」

ずくりと、胸が痛んだ。

ハーランは背後からオーリの腰を抱き寄せ、肩口に唇を寄せる。

「ごめん。俺、ずるいよな……」

「いいよ、謝らなくて」

本の背表紙を撫でるオーリ表情は、ハーランからはうかがえない。

「なあ。こっちむいて」

命じられるままに、オーリは振り向いた。

「笑って」

曖昧な微笑み。

その笑顔が、ひどく痛い。

自分で笑えと命じたくせに、その空虚な笑顔を見ていられなくて、ハーランは奪うようにオーリに口づけた。

諦めたように受け入れる唇に舌をねじ込んで、無反応の口腔を蹂躪する。

長々と舌を絡めて、唇を離すと、理不尽な罰の終わりを待つ子供のような暗い目で、オーリはただ床を見ている。

「オーリ、俺を見て」

素直にハーランを見たオーリの瞳に、だけど自分が映っていないことに、ハーランは気づいている。

誰を見ているんだろうか。

ヴィスクのことを？

それとも別の誰かのことを？

「どうしたら、俺のことを好きになる……？」

オーリは首を傾げた。

「ハーランのこと、好きだよ」

「そういう意味じゃない。わかるだろ？　なあ……わかってるだろ？　俺は……」

ハーランは、さらりとオーリの頬を撫で、唇をなぞり、指筋に指を這わせた。ワンピースの胸元のリボンをほどくと、その一瞬、はつきりとオーリの瞳にハーランの姿が映りこむ。

「ハーラン、嫌……」

「わかってる」

「逃げようとしたから……罰を与えるってこと？」

こんなにも、触れたいと思う。

なのにオーリにとっては、ハーランに触れられることは罰でしかない。

理解しているはずなのに、ひどく苦い。

リボンをすべてほどくと、オーリの体からずとんとワンピースが床に落ちた。

恐怖に粟立つ皮膚に唇を這わせると、ひ、と怯えた声が耳をくすぐる。

くらくらする。

かわいいそうなオーリ。

かわいそう。

助けてやりたいのに、苦しめているのも自分自身で、めちやくちやにしてやりたくないのに、幸せでいてほしいと神に祈る。

オーリ瞳からあふれた涙が、ふつくらとした胸に滴り、ハーランはそれをなめとった。

この味を、ハーランは知っている。

屈辱と、苦痛と、恐怖の涙。

この味に、こんなにも興奮する。

怯えて固まる体から下着をはぎ取り、細くて軽い体を抱え上げる。

両足が宙に浮いたまま、本棚に押さえつけられる形になって、オーリは困惑に揺れる目でハーランを見た。

「……何？　これ、どういう……ひう……！！」

硬く張り詰めたもので、熱く湿った入り口を軽くえぐると、意図を察したオーリが思いきり腕を突っ張った。

「ハーラン、やめて！　お、おろして！　こんなの嫌、お願い！」

「立ったままは嫌？　じゃあ、ベッドがいい？」

オーリは必死に首を縦に振る。

どろりと、黒くねばりつく感情が這いあがってくる。

這いあがって、のどからあふれた。

「じゃあ、言って。自分がどうしたいのか」

「え……あ……」

「ベッドで、俺にどんなふうに抱かれない？ どうされるのがいい？ 教えてくれよ。そうしたら、その通りにするから」

「そ、それは……ただ……普通に……」

「普通って、どんなふう？ 俺にとっては、このくらい普通なんだけど……」

「や、やだまって……やだ……や……！」

「ああ、濡れてきちゃったなあ。ほら、ちゃんと俺の首にしがみついてないと、一気に奥まで入っちゃうかも。俺がちよつと、腕の力抜いたら——」

「やだ、やだ、やだ……やだああ……！！」

弱弱しい泣き声と、首に縋る細い腕。

必死に拒絶しているのに、押し入った繊細な粘膜の奥では、ぬらぬらと絡みついて、奥へ奥へとうごめき続ける。

自重で体の一番深いところをえぐられ、オーリは苦痛から逃れようと、必死にハーランの首に縋って足に腰を絡めた。

二人の体がぴたりと密着し、まるで激しく求められているような錯覚を覚える。

「おく……苦し……抜いて……お願い、苦しい……くるし……」

「嘘つき」

嘲笑して、強く腰を突き出すと、オーリは叫んだ。

「あああああ！ や、やだ……やだ、動かないで……やだ……！」

「なんで？ いきそうだから？ 苦しんじゃないくて、気持ちいいんだって、知られたくないってこと？」

「違う、違う、違う……ちが……あ、ああ……ああ……！！」

ハーランは唇を舐めた。

ひどく、渴く。

オーリの体を荒々しくゆすりあげ、嬌声を上げっぱなしの濡れた唇に、ハーランは再び舌をねじ込んだ。

あふれる唾液をすすり上げて飲み下し、突き上げるたびに跳ねるオーリの体に、もつと快楽を与えなくなる。

ばさばさと本が床に落ちて、落ちた本に二人の体液が滴って無残に汚れた。

眠り姫のおとぎ話——。

結局、ハーランは立ったまま、オーリを限界まで痛めつけた。

ハーランがようやく果てたとき、オーリはぐったりとして動かず、涙を流しながら、うつろに遠くを眺めるばかりだった。

ハーランはそんなオーリの体をベッドに横たえた。

暖かいお湯で濡らした布で全身を丁寧にぬぐって、新しい服を着せて毛布をかけると、その寝顔は少し安らいだように感じられる。

ハーランはオーリの頬を撫で、髪をすいた。

こんなことをしてもどうにもならないと、誰より自分がわかっている。

それでも二十五年前と変わらない寝顔は、罪悪感にざわつくハーランの心を少しだけ穏やかにしてくれた。

覚えている。

泣いてばかりだった自分を抱きしめてくれた、優しいぬくもりを覚えている。

イタズラをしたら叱ってくれて、いじめられたら助けてくれて、家族のように愛してくれたことを覚えている。

だからずっと、家族のように過ごすのだと思っていた。

家族のように愛そうと思っていた。

それなのに。

「どうしてかなあ……」

柔らかな頬、ほっそりとしたうなじ、すべらかな肌——どうしようもなく、男としての自分が、女としての彼女を欲しがる。

自覚したのはいつだろう。

十五歳のあの日、数え切れない男たちに無理矢理体に性を刻み付けられて、死ぬほど他人を嫌悪した。

男の体を恐れて、女の体を求めて、支配されることをいって、支配することに耽溺した。

それでも、オーリだけは変わらなと思っていた。

おとぎ話の主人公のように、ベッドで穏やかに眠り続けるオーリの寝顔を見ると、ふと自分が、変わる前のあの頃に戻れたような気がして——。

それなのに、オーリは目覚めた。

そして、ハーランが変わってしまっていることに気づいたのだ。

支配者を恐れる目。

その目で見られると、内側から自分が崩れていくようだった。

無力な少年に向ける、慈悲と慈愛の微笑みを、自分はもう得られない。

それが苦しくてたまらなかった。

縫るつもりで握った手首を、加減を間違えて握り碎いたような気分だった。

痛みにもがいて、泣いて叫んで逃れようとするのを、無理矢理抱き寄せて閉じ込めている。

これで、どうして愛されるというのだ。

どうやって——。

「ごめんな……ごめん……」

許されないとわかっていながら、届かない謝罪を繰り返す理由を、ハーランはぼんやりと考える。

期待しているのだろうか。

許されることを。

信じているのだろうか。

いつか愛されるなどと。

本物の憎悪と嫌悪を、ハーランは知っている。

だからこそ、嘘で媚びを売ることもできない女が、慰めるように与えてくれた口づけの意味を、ずっとはかりかねている。

ただ、またあのキスが欲しくて——どうしようもなく欲しくて。

「俺、待つからさ……いつまでも待つから」

鳥かごの中で、小鳥が飛ぶのを諦めるその日まで。

与えられる餌を当たり前に思うその日まで。

とらえられたことを忘れてしまうその日まで。

依存を愛と思い込むその日まで。

「お願い。俺を好きになってよ」